

密教学研究 第31号 抜刷
平成11年3月30日

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・
ムクター・マーラー』所説のマンダラ

森 雅秀

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

森 雅秀

1. はじめに

『アビサマヤ・ムクター・マーラー』*Abhisamayamuktāmālā*（現観の真珠の首飾り、以下AMM）は、成就者ミトラヨーギン Mitrayogin によるマンダラ観想法の文献である。ミトラヨーギンは12世紀後半から13世紀にかけてインドおよびネパールで活躍した成就者と伝えられる。AMM の成立年代はおそらく西暦1200年前後、すなわちインドから仏教が滅びた頃と推定される。

AMM の全体は108のマンダラの「現観」で構成されている。この場合の「現観」は「サーダナ」（成就法）や「観想法」とほぼ同義である⁽¹⁾。108のマンダラの瞑想の方法をひとつひとつ説明しているのである。

AMM はおそらくサンスクリットで著されたと考えられるが、その原文は残されていないようだ。ネパールをはじめ世界各地の図書館などに所蔵されるサンスクリット写本に関する主要なカタログにも、そのタイトルは含まれていない⁽²⁾。一部が断片的に他の文献の中に含まれていたり、全体もしくは一部に対し別のタイトルが付されて残存している可能性もあるが、現段階では確認できない。

チベット語への翻訳が、ミトラヨーギンの直弟子とされるトンヨッ・ドルジエ Don yod rdo rje (Amoghavajra) によってなされ、チベット大藏經の論疏部におさめられている。ただし、デルゲ版やその系統にあるチョーネ版などには含まれず、北京版やその同一グループであるナルタン版などに限られる。大きさは北京版で46葉、ナルタン版で47葉である。本稿でもこのチベット訳を用

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

とくに三部の中心的存在である VA には、マンダラの制作法や、それを用いたアビシェーカ (abhisēka) やプラティシュター (pratisthā) の儀礼などが説かれ、インド密教の儀礼文献の中でも最も重要なもののひとつにあげられる⁽⁴⁾。NPY には VA に説かれるマンダラの観想法がまとめられている。Bhattacharyya による NPY のサンスクリット・テキスト (1972) は26章から構成されているため、NPY に含まれるマンダラの種類は26種程度と理解されることもあるが、実際は章によっては複数のマンダラを説くため、これらをすべて合計すると40種程度のマンダラが NPY に含まれることになる。これらのマンダラは NPY と同じ順序で VA の中でその描き方が解説されている。そしてアバヤーカラグブタはこれらのマンダラのいづれを用いても行うことのできるアビシェーカやプラティシュターの方法を、VA の中で説いた。当時のマンダラ理論や儀礼方法を集大成する意図が彼にはあったからである。⁴²

NPY や VA はチベット仏教やネパール仏教においても重視され、40種類のマンダラを中心にその実践体系が伝えられた。ミトラヨーギンの AMM もその流れの中に位置づけることができる。というのは、AMM に説かれる108種のマンダラの中の43種は、NPY に観想法が説かれるマンダラに一致するからである。ミトラヨーギンが AMM を著したときの重要な情報源が NPY であったことは間違いない。これより、アバヤーカラグブタが NPY や VA を著し、それが伝承されていく中で、成立からおよそ一世紀後の流布の状況を AMM から知ることができるのである。

本稿はこれまでほとんど研究のなされていなかった AMM をとりあげ、その内容を明らかにし、さらにその先行文献である NPY との関係や、当時の密教の状況、後世の展開などについての考察を行う。

2. ミトラヨーギンについて

ミトラヨーギン（図1）について伝える資料はほとんどないが、例外的にションヌペル gZhon nu dpal による『テブテルゴンポ』 *Theb ther sngon po* にかなりくわしい情報が含まれている。これにしたがって彼の生涯や彼の残した

いることにする⁽³⁾。北京版のデータを以下に示す。

Abhisamayamuktāmālā, mNgon par rtogs pa mu tig gi phreng ba, TTP,
No. 5022, Vol. 87, 29. 2. 1-47. 5. 6.

AMMに関する先行研究は、筆者の知る限りまったくない。文献の存在すらほとんど知られておらず、その意義や密教史上に占める位置などにも定まつた見解はない。インド密教をあつかった代表的な概説書や研究書、あるいは事典類にもその名称は現れない。作者のミトラヨーギンについても同様で、ほとんど関心が向けられることはなかった。

ミトラヨーギンのAMMはインド密教の末期に属する文献である。その成立年代である1200年前後の仏教については、たびかさなるイスラム教徒の侵寇によって壊滅的な状態にあったことが伝えられるが、当時の密教の具体的な状況についてはほとんど知られていない。この時代のインド密教の実践を知る上で、AMMは重要な情報を含んでいると考えられる。

AMMが108という膨大な数のマンダラ観想法を説くことも注目される。インド密教に属する文献でこれだけまとまった数のマンダラを説く文献はこれまで知られていない。タントラ經典や注釈書、儀軌類が説くマンダラは、通常ひとつないしは数種にとどまり、一部の例外を除いて、まったく異なる伝統や流派、あるいは異なるタントラの階梯に属するマンダラを説くことはない。ミトラヨーギンの時代、すなわちインドで仏教が滅ぶ頃に流通していた、あるいは少なくともその存在が知られていたマンダラの種類が百を超えることが、この文献から知られる。さらにその全体像から、当時の密教徒の実践の状況や関心の領域をうかがうことも可能であるかもしれない。

ところで、インド密教において流派や階梯の別を超えてマンダラの観想法を扱った文献としては、すでに『ニシュパンナ・ヨガーヴァリー』*Nispān-nayogāvalī* (NPY) がある。11世紀から12世紀にかけて活躍したアバヤーカラグプタ *Abhayākaragupta* の主著のひとつで、マンダラ儀軌『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* (VA), 護摩儀軌『ジュヨーティル・マンジャリー』*Jyotir-mañjari*とともに密教儀礼の三部作を構成していることは広く知られている。

ものについてみてみよう⁽⁵⁾。

ミトラヨーギンはオリッサのラダ Ra dha という町に生まれ、ラリタヴァジュラ Lalitavajra について修行し、さらにティローパ Ti lo pa の直弟子になったとされる。ただし、ティローパの年代（988—1069）から考えて、ミトラヨーギンが直接その教えを受けた可能性は低い。後世のものによるミトラヨーギンの権威付けであろう。

『テプテルゴンポ』の著者はこのあとミトラヨーギンの生涯に起こった出来事を18の奇跡としてまとめている。このうち、第一には、彼がカサルパナ観音 Khasarpana Avalokiteśvaraのもとで12年間学び、成就（シッディ）を得たこと、第2はエーカジャター Ekajatā から「方便の道」（upāyamārga）と呼ばれる行法を学んだことがあげられている。これらは奇跡と言うよりは、成就者としてのミトラヨーギンの修行の内容を示すものである。残りの第3から第18までには、さまざまな神通力や超能力を彼が示したエピソードが述べられている。仏教を壊滅させようとしてやってきたイスラムの王と軍隊を単独で撃退したことや、ヴァーラーナシーの王が奸計で彼を殺害しようと企て、これから容易に逃れたこと、人身御供を強要していた夜叉を調伏し、寺院を建立したことなどがあげられている。

これらの奇跡譚のうちのどこまでが史実であるかは不明であるが、ミトラヨーギンと彼をとりまく状況について、いくつかのことが推測できる。

第一に彼は大僧院に所属しない在野の修行者であったということである。これは彼の師とされるティローパや、ナーローパ Nāropa、マイトリーパ Maitripa、あるいは84成就者として知られる多くの成就者たちと同じ立場で



図1 ミトラヨーギン（『ミトラ白描集』所収）

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

ある。当時の密教は、ヴィクラマシーラやナーランダーなどの大僧院を基盤にして存続していたと考えられているが、同時に、僧院には属さない数多くの在野の実践者たちによっても支えられていたのであろう。ミトラヨーギンの第3の奇跡として、オーダンタブリー寺の僧侶たちの闘争に王が介入したとき、これを排除し調停にあたったことがあげられているが、これ以外に特定の僧院とミトラヨーギンを結びつけるエピソードは、奇跡譚には含まれていない。

第二に、奇跡の中にヴァーラーナシー（ペナレス）の王が頻繁に登場することが注目される。その数は18のうちの12で、多くは懷疑的な王に信仰心を植えるために、ミトラヨーギンが神通力を発揮したことを伝える。これもどこまでが史実であるかは疑問であるが、ミトラヨーギンが活躍した地域が、ヴァーラーナシーを含む北東インドであったことを予想させる。これは当時のインド密教がパーラ朝の版図にほぼ限られていたことに対応する。イスラムの軍隊を撃退したエピソードは、ムスリムの侵寇によって危機的な状況にあったことを逆に示し、その脅威は僧団の中の僧侶だけではなく、在野の行者にまでおよんでいたことを推測させる。

『テプテルゴンポ』はこれらの18の奇跡をあげた上で、以上が有名な「ミトラの18奇跡譚」であるとまとめているが、さらにそのあとに19、20の2つの奇跡を追加している。第19の奇跡はヴァースドゥヴィーパ（Venudvipa）という所で観音にあい、「将来の衆生のために、4種のタントラのアビシェーカを1回で与えよう」と言われたことが、そして、続く第20の奇跡で、ヴァーラーナシーの王がミトラヨーギンを7日間にわたって礼拝したところ、すべてのタントラの階梯のアビシェーカをひとつのマンダラで1回で与えたというものである。後者のアビシェーカは当然、前者の観音から授けられたものであろう。この2つの奇跡は、本稿でとりあげているAMMと密接にかかわるものである。

『テプテルゴンポ』はさらにミトラの活動に関して、チベットの翻訳官トプ・ロツアワ・チャンパ・ペル Khro pu lo tsā ba Byams pa dpal (あるいはチヤンペー・ペル Byams pa'i dpal)とのエピソードを紹介する。トプ翻訳官(1173—1225)⁽⁶⁾はカギュ派の一派トプ派を興した人物である。チベットで学問

を修めた後、ネパールにおもむき、そこでパンディタ・ブッダシュリー Buddhaśrī のもとでさらに学ぶ。このとき大成就者がスヴァヤンブーナートにいることをブッダシュリーにより教えられ、会いに行った。この大成就者がミトラヨーギンである。ミトラヨーギンに会ったトプ翻訳官はチベットに彼を招聘することを決意し、その後、幾多の困難を経てようやくそれを実現した。ミトラヨーギンはチベットにおいて多くの法を説き、さらにトプ翻訳官の建立したトプ寺の本尊の弥勒像の完成式も挙行し、18カ月の滞在の後、ネパールに戻ったという。

トプ翻訳官によるミトラヨーギンのチベット招聘については、ゲルク派の18世紀の学僧トゥカンによる『一切宗義』「カギュ派の章」にも記され、おそらく史実であったのであろう⁽⁷⁾。トゥカンによれば、トプ翻訳官がネパールにやってきたのは24歳のときで、生年から換算して西暦1197年になる。トプ翻訳官はミトラヨーギンの招聘の後、高名な亡命僧で、カシミール・パンディタの名で知られるシャーキャシュリーバドラ Śākyasribhadra を続けてチベットに迎える。トプ翻訳官がシャーキャシュリーバドラを招聘する旅に出たのは1204年とされるため、ミトラヨーギンのチベット滞在は1200年頃になるであろう。トプ翻訳官がミトラヨーギンに出会ったとき、すでにミトラは成就者として高名を馳せていてことから、その晩年であったとすれば、彼の活動年代は12世紀後半を中心として、13世紀にまでおよんでいたと見ることができる。

『テプテルゴンポ』の紹介するミトラの伝記のおわりの部分は「ミトラの120法」(ミトラギャツア, Mi tra brgya rtsa) という名の壮大な実践体系である。全体は3つの部分に分かれ、そのうち中心となる第2の部分が120の項目で構成されているため、この名がつけられている。第1の部分は5つの項目からなり、第3の部分は「エーカジャターのアビシェーカ」と「観音の教え25頌」という2項目が上げられている。『テプテルゴンポ』はそれぞれの項目を列挙するだけで、具体的な内容はあきらかにしていないが、観音の成就法とそのアビシェーカを中心として全体が組み立てられている。観音とその眷属であるエーカジャターは、すでに述べたミトラヨーギンの奇跡の第1と第2に対応し、彼

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

の行法の基礎にあるのであろう⁽⁸⁾。

ミトラに帰せられる著作はきわめてわずかで、AMM以外には以下の3点を数えるにすぎない⁽⁹⁾。いずれもチベット訳のみで伝わる。

Trimśatyavadāna, rTogs pa brjod pa sum cu pa, TTP, No. 2931, Vol. 68,
14. 5. 6-15. 3. 6. (Tr. Byams pa'i dpal).

Padaratnamālā (PRM), *rKang grangs rin chen phreng ba*, TTP, No.
5021, Vol. 87, 28. 3. 1-29. 2. 1. (Tr. Don yod rdo rje).

Siddhisanmārganirṇaya, *Grub pa dam pa'i lam nges pa*, TTP, No. 3295,
Vol. 69, 261. 2. 1-261. 3. 4 (Tr. Mitrajoki = Mitrayogin, Byams pa'i
dpal).

これらの著作の中で、AMMとの関係では『パダ・ラトナ・マーラー』(PRM)が重要である。北京版でわずかに3葉、全体は34の偈頌が含まれているにすぎない小品であるが、この中でミトラヨーギンはAMMでとりあげた108のマンダラのすべてに関して、中尊の名称と、マンダラを構成する尊格の数を上げている。PRMの中心を占めるのはこれらの情報であるが、その前後でミトラヨーギンはこれらのマンダラの観想法をともなったアビシェーカについて簡略に述べる⁽¹⁰⁾。すなわち、前行、三宝への帰依、資糧の積聚に始まり、地儀軌を行ってマンダラを描く。108のマンダラの観想はマンダラを描く前に行われるが、実際のマンダラは、9つの区画(gling)をそなえたマンダラひとつだけである。このマンダラを前にしてアビシェーカが行われる。アビシェーカの内容は、投華得仏、五智の灌頂、6種の誓誠、金剛阿闍梨の灌頂、そして無上ヨーガの4種の灌頂である。

この内容は、すでに見たミトラの奇跡の第19、第20に対応している。すなわち、観音からミトラに授けられたアビシェーカは、4タントラのマンダラすべてのアビシェーカをひとつのマンダラで1回で行うものであった。4タントラすべてのマンダラとしてPRMがあげるマンダラの108種の具体的な内容が、AMMにおいて説かれているのである。

3. 『アビサマヤ・ムクター・マーラー』の概要

全体について

AMM には108種のマンダラの現観が説かれている。テキストには各マンダラの瞑想が次々とあげられているだけで、序文や結論に相当する部分はない。巻末に偈頌が二偈おかれるが、108の現観を説き終わったことと、持金剛の功德を称賛しているにすぎない⁽¹¹⁾。

マンダラの数が108であるのは、おそらく仏教徒にとっての聖なる数に由来するのであろう。内容からは108であることの必然性は考えられない。たとえば27種のマンダラが4つというように、108がいくつかに分類されて、グループを構成することも、明確には読みとれない。ただし、この108という数とそこで説かれるマンダラの内容は、前にあげた PRM の示すマンダラに一致する。単に偶然に108になったわけではないであろう。

使用したチベット訳テキスト全体は、この翻訳が十分な校閲を受けていないという印象を与える。訳語の不統一やつづり字の混乱がきわめて頻繁に登場するからである。たとえば、「マンダラ」(mandala) という語の訳語として一般的な dkyil 'khor もときどき現れるが、音写にもとづく dal という訳語が用いられることが多い。また、南東などの四隅を示すために、mer, dbang ldanなどを用いることよりも、shal lho や byang nub という、四方を示す語をふたつ組み合わせた訳語を好んで使用する⁽¹²⁾。つづり字に関しても、基本的な尊名であってもしばしば混乱が見られる。

108のマンダラの現観については、ほぼ同じ順序で説明される。前行として資糧を積むことを説き、続いて地水火風の四大の観想を行う。四大の最後の地輪の上には樓閣を観想する。マンダラによっては樓閣に加えてチャクラ（車輪）を観想することが指示される。樓閣が2重、3重の構造をそなえている場合も、具体的に説明される。これらの「場の設定」を終えて、マンダラに含まれる尊格の尊容が中尊から順に説かれる。一尊ごとに方角や位置の後に尊名があげられ、身色、面数、臂数、持物、姿勢などが規定される。ただし、四仏や

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

四摺のように何度も現れるグループについては、一尊ごとに説明せず、グループ名のみをあげることも多い。また同一の構成員のマンダラが続く場合は、「前に同じ」と済ませ、具体的な説明を省略することもある。

これらのマンダラの尊格を観想すると、瞑想するものは智薩埵を導いて、合一させる。智薩埵と対とする「三昧耶薩埵」という用語は現れないが、これまで説明してきた部分が三昧耶薩埵（あるいは三昧耶マンダラ）の観想に相当すると考えられる。両者の合一した尊格たちに対し、行者は称賛し、瞑想の中で灌頂を与える。各マンダラの最後の部分ではマントラが規定される。瞑想のために用いられる「心臓の種子のマントラ」(thugs kha'i sa bon) と、中尊のマントラであるフリダヤ・マントラ (snying bo'i sngags) がそれぞれ示される。また、マンダラの各尊がどの部族に属するかも規定される場合がある。

ミトラヨーギンは108のマンダラすべてにわたって、ほぼこの順序で現観の方法を説く。最初にあげられるマンダラのみは、2つ目以降に比べてややくわしいが、それ以外についてはマンダラごとに詳細であったり、簡略であったりすることもなく、ここで示した以外の内容を含むものもない。また、他の文献や異説に言及することもない。ミトラヨーギンは純粋に観想のためのマニュアルを著そうとしたようである。

マンダラの種類

AMM に説かれる108のマンダラの名称、尊格数などを示すと表1のようになる。すでに述べたように、このうちの43種のマンダラはアバヤーカラグプラのNPYに基づいているが、このことについては後でくわしく見ることにして、まずその全体を概観してみよう。

ここに説かれるマンダラはきわめて多岐にわたる。カラチャクラ・マンダラや金剛界マンダラ、サンヴァラ・マンダラのようによく知られたものも多いが、実際の作例がチベットやネパールに残されていないマンダラも数多く含まれる。

中尊についてみてみると、何尊かは複数のマンダラに登場する。多いものか

らあげていくと、金剛手の13回が群を抜いている。続いてサンヴァラ、ヴァジュラヴァーラーヒーの8回、ヤマーリ、ヴァジュラバイラヴァ、マハーマーヤーがそれぞれ3回となっている。ヘーヴァジュラも8つのマンダラに登場するが、これは同一の經典にもとづく4種のヘーヴァジュラ、すなわち、心臍(garbha)と身口意のヘーヴァジュラ2組からなる。金剛手を除くこれらの尊格は、いずれも無上ヨーガ・タントラに属する、いわゆるヘルカ系の尊格で流派の別などによって尊容が異なったり、周囲の尊格に異同がある。このほか、観音に4種、文殊に3種があるが、カサルパナ観音やアラバチャナ文殊のような特定の名称を冠しているものが含まれる。

女尊を中尊としたマンダラも多く含まれる。マーリーチー、サラスヴァティー、般若波羅蜜、パンチャラクシャー、ターラー、尊勝、白傘蓋、葉衣などのマンダラが登場する。これらの大半は所作タントラのクラスに属する女尊であるが、それぞれここでは眷族を率いて、マンダラを構成している。無上ヨーガ・タントラの女尊も、すでにあげたヴァジュラヴァーラーヒーをはじめ、ナイラートミヤー、クルクッラー、金剛ターラーなどが現れ、全体の約5分の1の22のマンダラが女尊のマンダラとなっている。

およそ10種のマンダラには流派の名称として個人名があげられている。その中にはティローパ、ナーローパ、マイトリーパなどの高名な成就者の名が見られる。とくにカギュ派にかかわる成就者が多く見られることは、ティローパに師事したと伝えられ、トプ翻訳官によってチベットに招聘されたミトラヨーギンの立場に関係するのであろう。

ヨーガ・タントラのクラスに属するマンダラもいくつか含まれる。このクラスの代表的な經典である『真実摂經』*Tattvasamgraha* (『初会の金剛頂經』) に説かれるマンダラのうち、金剛界品、降三世品、遍調伏品、一切義成就品の四大品の大マンダラに相当する4種のマンダラが10, 14, 15, 16に現れる。『悪趣清淨タントラ』*Durgatipariśodhanatantra* にもとづくマンダラも6種ある。これは『金剛頂經』のマンダラの前後におかれているが、1種のみは100番目というかなり後の方に説かれている。また、やはりこの經典にもとづくとされ

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

る、金剛手を中心とした3種のマンダラが61から63にかけて登場する。星宿や四天王、護方神、八大竜王などを周囲に配したマンダラで、「世間のマンダラ」とも呼ばれている。このほか『ナーマサンギーティー』にもとづいたマンダラも76番に現れる。

マンダラの配列

これらのヨーガ・タントラのマンダラの位置からもわかるように、108種のマンダラの中で、特定の經典にもとづき、密接な関係にある複数のマンダラは、必ずしもまとまって置かれていません。また、いわゆるタントラの4つの階梯、すなわち、所作、行、ヨーガ、無上ヨーガの4クラスに、これらのマンダラの配列は対応していない。ミトラヨーギンはいかなる基準にもとづいて、これらのマンダラを並べたのであろうか。

全体の配列を簡単に示しておこう。

はじめに金剛手のマンダラが3つ置かれ、これに文殊や観音のマンダラが続く。8番からは『悪趣清浄タントラ』『真実摂經』そして『理趣廣經』のマンダラが連続している。19番からは無上ヨーガ・タントラの父タントラ系のマンダラが始まる。19、20は『秘密集会タントラ』の聖者流とジュニヤーナパーダ流のマンダラで21番の金剛フーンカーラのマンダラをはさみ、ヤマーリ、ヴァジュラバイラヴァのマンダラが3つずつおかれる。金剛フーンカーラ・マンダラは母タントラの『アビダーナ・ウッタラ・タントラ』*Abhidhānottaratantra*にもとづくマンダラであるが、ここでは金剛フーンカーラの回りの10尊が、秘密集会のマンダラに登場する十忿怒尊に置き換えられている。

28番からは母タントラ系のマンダラとなる。ヘーヴァジュラの4種のマンダラ2組が、間にナイラートミヤーのマンダラをはさんで置かれている。37番からはサンヴァラのマンダラが9種類続く。ただし41番は明妃であるヴァジュラヴァーラーヒーを中心とした37尊のマンダラである。46から50はヘーヴァジュラ・マンダラの発展形態であるパンチャダーカ・マンダラ、51から56はやはりサンヴァラ・マンダラから作られたシャトチャクラヴァルティン・マンダラで

ある。いずれも 5 つあるいは 6 つの小マンダラを組み合わせたマンダラであるが、ここではそれをひとつずつ独立させている。

57番にはふたたびナイラートミヤー・マンダラが現れ、58番以降の 3 種のマンダラはやはり母タントラ系のマハーマーヤー・マンダラである。61から 63 は先述の『悪趣清浄タントラ』にもとづいた金剛手の 3 種のマンダラに相当する。64, 65 は『チャトウフピータ・タントラ』*Catuḥpiṭhatantra*, 66, 67 は『ブッダカパーラ・タントラ』*Buddhakapālatantra* にそれぞれ依拠するマンダラである。68番からは金剛ターラーなどの女尊を中心とするマンダラ 5 種が続く。

73番は全体で最も規模の大きいカラチャクラ・マンダラ, 74, 75 は『マヤージャーラ・タントラ』*Mayājālatantra* に関連する 2 種の文殊のマンダラである。このうち 75 の法界語自在マンダラも 100 尊を超える規模の大きなマンダラである。この後に、馬頭、金剛薩埵、アラパチャナ文殊、パンチャラクシヤー、不動などのマンダラが続く。82 から 86 は 5 種の金剛手のマンダラ, 87 がガルダのマンダラ, 89, 90 は観音のマンダラとなる。91番からヴァジュラヴァーラーヒーの 8 種のマンダラがまとまって登場し、以下、ターラー、大日、阿閦、釈迦、そして尊勝などの女尊のマンダラが続く。最後はジャンバラとマハーカーラのマンダラとなっている。

このようにして全体を眺めても、明確な配列の原理や構造は見てこない。しかし、全体的な傾向として、いくつかの点が指摘できる。

第一に、同一の尊格を中心とするマンダラは、ある程度まとまって登場することがあげられる。とくにそれはサンヴァラ、ヘーヴァジュラ、ヴァジュラヴァーラーヒーなどの無上ヨーガ・クラスのマンダラに顕著である。マハーマーヤーやブッダカパーラなどのマンダラについても同様である。またこれら母タントラ系ばかりではなく、父タントラ系のマンダラも、数は少ないが、尊格ごとにほぼまとめられている。しかし、大日や釈迦、あるいは観音、文殊などは、必ずしもまとまった場所にはない。また、全体で最も多い金剛手は、何箇所かに分かれて登場する。

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

第二に、全体の配列はタントラの階梯を意識してはいるが、それに厳格にしたがうものではないことがあげられる。後世のチベットの人々による4クラスのタントラ經典の分類は、インドにおいても萌芽的には認められるが、この108のマンダラは、たとえば所作、行、ヨーガ、無上ヨーガという発展階梯の順に並べられているわけではない。すでに見たように、無上ヨーガ・クラスのタントラに属するマンダラのいくつかはまとまって置かれているが、それもすべてではない。たとえば、サンヴァラは37から45にあるのに対し、サンヴァラと密接な関係にあるヴァジュラヴァーラーーのマンダラが現れるのは90番台である。ヨーガ・タントラに属する『悪趣清浄タントラ』や『真実摂經』の1部のマンダラが分離されているのも、すでに見たとおりである。

こうしてみると、AMMの108種のマンダラは、何かひとつの原理にしたがって配列されたとは考えにくいことがわかる。タントラの階梯やマンダラの中尊にしたがってある程度まとまりを持たせながらも、ミトラヨーギンはそれを徹底させたわけではなかった⁽¹³⁾。

ところで、AMMの108種のマンダラのうちの43種はアバヤーカラグプタのNPYのマンダラである。これらのマンダラはどこに現れ、どのような順序で配されているのであろうか。

NPYの中にあげられているマンダラをすべて合計すれば、全部で42種になる。ただし、これはパンチャダーカ・マンダラとシャトチャクラヴァルティン・マンダラをそれぞれひとつずつに数えているため、AMMのようにそれぞれ5種と6種に分ければ、全体は51種になる。このうちAMMに含まれないマンダラは『サンプタ・タントラ』*Samputatantra* 所説の金剛薩埵マンダラ、『金剛甘露タントラ』*Vajrāmṛtatantra* 所説の4種のマンダラ、ブーダーマラ・マンダラ、そしてヴァジュラヴァーラーーの2種のマンダラである。これらのマンダラをミトラヨーギンがAMMに取り入れなかつた理由は明らかではない。残りの43種のマンダラがAMMの108種のどこに現れるかは、表2に示したとおりである。

これを見ると、43種のマンダラはまとまって現れるのではないことがわかる。

全体の中央あたりに集中しながらも、はやいものは10番、最も遅いもので80番目に現れる。さらに NPY の中で説かれる順序と AMM に現れる順序も一致していないことも表 2 から明らかである。ミトラヨーギンは、NPY に説かれるマンダラをそのままの順序で AMM に採用したのではなく、配列に変更を加えながら、自分の108のマンダラの体系に組み込んでいる。

すでに別のところで明らかにしたように、もともと NPY のマンダラの配列は、各マンダラの属するタントラの階梯や中尊の別にしたがうものではない⁽¹⁴⁾。これらのマンダラは、マンダラそのものの形態の類型にしたがって並べられている。このマンダラの形態の説明を主要なテーマのひとつとする VA での配列にしたがったものである。そのため、NPY ではヘーヴァジュラのような同一の尊格の複数のマンダラが離ればなれになったり、同じ『ブッダカパーラ・タントラ』にもとづく 2 種のマンダラが連続して登場しない。

AMM の中に登場する NPY のマンダラの配列は、ある程度はタントラの階梯を配慮したものとなっている。ヨーガ・タントラの 2 種のマンダラと父タントラの 5 種の後に母タントラのマンダラが続く。ヘーヴァジュラのマンダラはまとめられ、『チャトゥフピータ・タントラ』『ブッダカパーラ・タントラ』の 2 種のマンダラもそれぞれ連続している。ただし、金剛塔ーラーから後は、所作、ヨーガ、無上ヨーガのマンダラが混在しており、明確な基準は見いだし得ない。これらは、同一の尊格のマンダラをまとめ、タントラの階梯をある程度は反映していた AMM の108のマンダラの全体の傾向と同じである。ミトラヨーギンは NPY の順序にしばられず、おそらく彼自身の発想で、他の65のマンダラとあわせて全体を組み立て直しているのである。

NPY のマンダラの登場する位置からもう一つ指摘できるのは、同一の尊格のマンダラが連続する場合、NPY のものがそのはじめにあげられていることである。ヤマーリ、サンヴァラ、マハーマーヤーなどがこれに相当する。ミトラヨーギンが NPY のマンダラを基準にして、全体を組み立てようとしていたことがうかがえる。

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

『ニシュパンナヨーガーヴァリー』との相違

AMM の最も重要な情報源に NPY があったことは明らかであるが、ミトラヨーギンは NPY の内容をそのまま AMM に再録したわけではなかった。

NPY と AMM に含まれるマンダラを比較してみると、いろいろな点で違いがある。

第一に、いくつかのマンダラで構成する尊格に変更が加えられていることがあげられる。たとえば、カラチャクラ・マンダラは NPY では634尊で構成されるが、AMM では487尊に減少している。法界語自在マンダラも NPY が221尊に対し、AMM は119尊にとどまる。100尊以上の減少は、AMM が第4重の尊格をあげていないことや、第2重の四方にいる12尊ずつの女神が10尊に減らされていることなどによる。このマンダラでは両者に登場する尊格の構成にも一部異同がある⁽¹⁵⁾。逆にパンチャラクシャー・マンダラでは尊格が増加しており、NPY が13尊に対し、AMM では17尊になっている。単に4尊増やしたのではなく、NPY の13尊のうちの4尊は AMM には含まれず、別の尊格に交替している⁽¹⁶⁾。

第二に、すでにふれたように NPY ではひとつのマンダラになっているパンチャダーカとシャトチャクラヴァルティンのマンダラが、それぞれ5つと6つのマンダラに分割されている。このうち、パンチャダーカは単に分割されただけであるが、シャトチャクラヴァルティンの方は、各マンダラの四方と四隅に8尊の尊格を補うため、すべて18尊で構成されることになる⁽¹⁷⁾。

このほかに一部の尊格の名称が一致しない例や、門衛である四摄菩薩が、NPY では男尊であるのに対し、AMM ではしばしば女尊に変更されていることも指摘できる⁽¹⁸⁾。

こうしてみると、ミトラヨーギンは NPY に説かれるマンダラを忠実に AMM に収録したのではなく、いくつかのマンダラは AMM には採用せず、また残りのマンダラについてもその順序を入れ替え、マンダラそのものにも、尊格の削減、追加、変更、あるいは構造上の変更を行っていることが明らかである。ミトラヨーギンは AMM や PRM の中でアバヤーカラグプラグ VA,

NPYについては一言も言及していない。また、すでに見た彼の伝記にも、アバヤーカラグブタのマンダラの伝統との接点は見あたらない。チベットの文献にはVAの教えを受け継いでいった系譜があげられているが、その中にもミトラヨーギンは現れない⁽¹⁹⁾。ミトラヨーギンはアバヤーカラグブタの伝統の忠実な継承者ではなく、単に素材としてNPYを採用しただけであったのである。逆にこのことは、この時代のNPYの流布の状況の一端を示すものもある。

4. その後の展開

ミトラヨーギンがAMMの中で説いた108種のマンダラの現観は、後世の仏教徒たちにどのように受け入れられたのであろうか。

ミトラの生存中にすでに仏教が壊滅的な状況にあったインド内部では、彼の伝統を受け継いだものや、その著書に対して注釈書を残したものはいないようだ。おそらく晩年に滞在したと考えられるネパールにおいても、ミトラヨーギンのマンダラ観想法の伝統は、少なくとも文献上は確認できなかった。

18ヶ月という短い期間であるが、その足跡を残したチベットではどうであったか。プトンやツォンカパのような大学者の著作にミトラヨーギンやAMMに関係する文献は見られない。

マンダラに関するチベット人の著作で最も重要なもののひとつに、18世紀にロテル・ワンポ Blo gter dbang po らによって編纂された『タントラ部集成』*rGyud sde kun btus* がある⁽²⁰⁾。その名のとおり、当時のチベット仏教に伝わるマンダラ理論を集大成した一大叢書である。また、この文献にもとづいて描かれた139点からなるマンダラ図のコレクションも伝えられている⁽²¹⁾。『タントラ部集成』の139点のマンダラと、AMMの108種のマンダラの内容を比較してみると、金剛界マンダラ、サンヴァラ・マンダラ、あるいは『悪趣清淨タントラ』の数種のマンダラなどの一部のマンダラは対応するものが含まれるが、AMMのマンダラの大半は『タントラ部集成』の中には見いだし得ない。とくに、AMMの中でNPYと関係のない65種のマンダラについては、一致する

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

ものはほとんど含まれない。さらに、NPY から導入されたマンダラに関して、NPY と AMM との間に異同があるものは、オリジナルの NPY に一致したもののが『タントラ部集成』では説かれている。たとえばカラチャクラ・マンダラは『タントラ部集成』でも634尊であるし、法界語自在マンダラは211尊で構成され、その配列も NPY に一致する。パンチャダーカやシャトチャクラヴァルティンも NPY と同様、それぞれひとつのマンダラに複数のマンダラが収められている。『タントラ部集成』が説くのはオーソドックスなマンダラであり、そこに AMM が介入した可能性はほとんどないのである。

それではミトラヨーギンのAMMは後世の仏教にほとんど何の足跡も残さなかつたのであろうか。

ここに一冊の白描の図像集がある（図2）⁽²²⁾。今からおよそ60年前の1938年に中国の北京で初版が出版されたことが、奥付より知られる。本文の説明によれば、この図像集はダルワ・トゥルク Dar ba sprul sku という高僧が55歳の時に北京に招かれ、中国全土とチベット、モンゴルから集まつた548人の僧侶



図2 『ミトラ白描集』「ミトラの部」第1番 サラスヴァティー

と在家信者に対してアビシェーカを行い、そのときに彼らに示した尊像の画像を白描にしたものという。ダルワ・トゥルクについては年代が未詳であるが、文脈からは1938年からそれほど遠くない時期にこのアビシェーカは行われたらしい。これらの尊像は「ミトラの65のマンダラ」と、「ドルテン (rdor phreng すなわち VA) の54のマンダラ」の尊像であるという。そして、図像集の名称は『ミトラとドルテンの尊格たちの主尊の尊容を、内容とともに示した書』 (*Mitra dang rdor phreng gi lha tshogs kyi gtso bo'i sku brnyan mthong ba don ldan bzhugs so* : 以下 MDH) と名付けられている。

「ミトラの65のマンダラの尊格」が、AMM の108の中の NPY 以外のマンダラ65種を指しているのは明らかである。「VA のマンダラ」とは AMM の残りの部分、すなわち NPY のマンダラに対応するが、その54という数は AMM に含まれる43には一致しない。これについては後述する。AMM で説かれたマンダラの伝統が、今世紀のチベット仏教でも、なお生き残っていたのである。しかし、それはもとの AMM とまったく同じというわけではなかった。

MDH を見ると、その順序は AMM とは大きく異なる (表 3)。まず、全体が前半のミトラの65尊と後半の VA の54尊というふたつの部分に大きく分かれている。AMM では NPY のマンダラは第10番から第80番の間に置かれ、NPY 以外のマンダラと混在していた。MDH では AMM がこのふたつのグループで構成されていることを知っていて、NPY の部分を抽出し、後半にまとめたのである。しかし、前半の65のマンダラの順序は、AMM から NPY のマンダラを単に取り除いてできたものではない。MDH には尊像の白描と対となる形でマンダラの名称、尊数、マントラなどがそれぞれ一ページにわたって記されている。これらのはじめにはマンダラが属するタントラの階梯、すなわち所作、行、ヨーガ、無上ヨーガの別が明記されている。これによれば、1から21が所作、22から40がヨーガ、41から65が無上ヨーガとなっている。つまり、タントラの階梯にしたがって、あらたに順序が与えられているのである。さらに各階梯の内部についても、同一の尊格や、同じ經典にもとづくマンダラの中尊はまとめられている。所作タントラでは、はじめに女尊が置かれ、観音や金

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

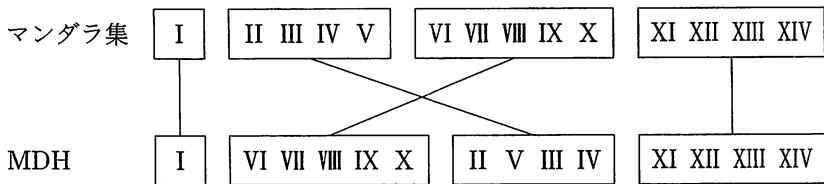
剛手がまとまって配されている。ヨーガ・タントラでは『悪趣清浄タントラ』のマンダラがすべてまとめられ、これに『真実摂經』の3マンダラが続いている。無上ヨーガについても、父タントラ系、母タントラ系にまとめられ、同一の尊格が連続していることがわかる。

これらのまとめ方は、AMMの段階でも不完全ではあるが認められた。MDHではそれがさらに徹底して行われているとみることができる。

後半のドルテンの部分、すなわち NPY に相当する部分についても同じ傾向を見て取れる。しかし、ここでは逆に無上ヨーガ、ヨーガ、行、所作の順でまとめられている。無上ヨーガの内部では父タントラ系が1から4で、残りはすべて母タントラ系である⁽²³⁾。同一の尊格や同じ經典にもとづく尊格は、やはりここでもまとまって置かれているが、NPY や AMM から直接この配列を説明することは困難である。さらに、ここには AMM に含まれていなかったマンダラが9点追加されている。これら54の尊格の配列には、もう一つ別の伝統が介入しているからである。

チベットにVAが伝わった系統のひとつに、サキヤ派のゴルチェン・クンガサンポ Ngor chen Kun dga' bzang po にいたるものがある。彼は、後世サキヤ派の名刹になるゴル寺を建立するにあたり、その内部を飾るために、VAの42種のマンダラに『阿闍梨所作集成』*Ācāryakriyāsamuccaya* から3種のマンダラを加えた45種のマンダラを、14枚のタンカに描くように、ネパール人の絵師たちに依頼した。このときのタンカは一部が現存しており、全体のマンダラの配列はおそらく表4のようであったと推測される⁽²⁴⁾。45種のマンダラにはAMMでは省かれたマンダラ8種も含まれ、NPY や VA と密接な関係にある『阿闍梨所作集成』の3種のマンダラが末尾に加えられた。このときの配列の方法は、おそらく同一の尊格を中尊とするマンダラや、密接な関係にあるマンダラをまとめ、タントラの階梯にしたがったものである。その順序はやはり無上ヨーガの父タントラ、同じく母タントラ、そして、ヨーガ、行、所作の順である。この配列は VA のマンダラの配列としてよく知られていたようで、17世紀のゲルク派の活仏チャンキヤ1世の著作にも見ることができる⁽²⁵⁾。

ゴル寺のマンダラ集の配列と MDH のそれとを比べてみると、よく対応していることがわかる。前者の14点のタンカをローマ数字の I から XIV とし、これが MDH の中で現れる順を示すと次のようになる。



II から V の四点のみが X の後ろ、すなわち無上ヨーガとヨーガとの間に移され、この移されたグループの内部が II V III IV となっていることがわかる。残りのすべてはゴル寺の配列に一致する。各グループ内の四点のマンダラの順序もまったく同じである。無上ヨーガ・タントラの最後に移される 4 点は、『ヘーヴァジュラ・タントラ』に関するマンダラで、ゴル寺のマンダラ集ではこれが無上ヨーガ・タントラの母タントラのはじめに置かれていた。また、この中で順序が変更された V のグループは、ヘーヴァジュラを中心とする四つのマンダラである。これがもう一つのヘーヴァジュラの四点のマンダラに続いているのは、AMM と同じである。つまり、同一の尊格のマンダラをまとめ、しかも AMM に登場する順序に合致するようになっているのである。

MDH には尊格数も各マンダラについて示されている。これを AMM や NPY と比較してみると、両者で一致していなかったカラクチャクラ・マンダラ（図3）や法界語自在マンダラなどはすべて NPY と一致していることがわかる。これは MDH が参照していた「ドルテンのマンダラ」が、AMM に含まれているものではなく、その情報源である NPY や VA、あるいはその伝統を忠実に受け継いだものであったことを示している⁽²⁶⁾。

筆者注 なお MDH のドルテン部が 54 尊となっているのは、パンチャダーカとシャトチャクラヴァルティンをそれぞれ 5 つと 6 つに数えるためで、これによってゴル寺のマンダラ集の 45 よりも 9 つ多いことになる。これらのマンダラをこのように分割するのも、すでに見たように AMM 以来の方法である。

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ



図3 『ミトラ白描集』「ドルテンの部」第36番 カーラチャクラ

このようにインド仏教の末期にミトラヨーギンによって作られたAMMの伝統は、順序の変更や、NPYとの対応部分の復元、さらには他の伝統との合揉などを経て、今世紀のチベット仏教にまで伝えられているのである。

5. おわりに

12世紀後半から13世紀にかけて活躍したミトラヨーギンのマンダラ成就法文献AMMについてみてきた。本書に関してはこれまでほとんど研究がなされていなかつたが、108種類という膨大な数のマンダラの成就法についての情報を搭載した注目すべき文献である。インド仏教の末期に属する文献として、当時の密教の実践や図像の体系を知る上で、貴重な情報源となる。もちろん、AMMが当時流行していたマンダラをすべて網羅しているとは言えないだろうし、むしろ、108という聖なる数に合致するような取捨選択が行われたと考えられる。しかし、ミトラヨーギンという成就者が、当時のマンダラについての知識をこの書の中で体系化しようとしていたのは確かであろう。

AMM の著者のミトラヨーギンが、『テプテルゴンボ』において紹介された数々の奇跡を行った行者と同一人物であった確実な証拠はない。またその活動した地域についても確定的な情報はないが、チベットに彼を招聘したトプ翻訳官と出会ったのがネパールのカトマンドゥであつことは、複数の文献で確認できる。ミトラヨーギンの当時の活動の拠点はすでにネパールに移っていたのであろう。すると、AMM に説かれているのは、当時のネパール仏教が保持していたマンダラ成就法であったかもしれない。108種のマンダラの大半を占めるのは、金剛手を中心としたマンダラや、観音のマンダラ、『悪趣清浄タントラ』のマンダラ、あるいはサンヴァラをはじとする無上ヨーガ・タントラの母タントラ系のマンダラであるが、これらはいずれも現在のネパールの仏教（ネワール仏教）で人気の高いものである⁽²⁷⁾。

AMM のもう一つ注目される点は、ミトラヨーギンのおよそ 1 世紀前に現れた著名な学僧アバヤカラグプタによる NPY のマンダラの大半が、そこに含まれていることである。NPY が早くからチベットやネパールの仏教徒によって重視され、受容されていたことは知られているが、実際にその内容を利用して、あらたに独自のマンダラ観想法の文献を編成し直したものは、AMM 以外にその例を知らない。しかもミトラヨーギンは NPY のマンダラの順序を入れ替え、さらに一部の尊格やマンダラの構成にも変更を加え、かなり自由に手を加えている。NPY の伝統が伝わる状況を示す例として興味深い。これは、たとえばミトラヨーギンの同時代人であったシャーキャシュリーバドラが、NPY や VA の教えを忠実にチベットに伝え、その翻訳まで行ったことと対照的である⁽²⁸⁾。この相違は、大僧院出身でアバヤカラグプタの直系を標榜するシャーキャシュリーバドラと、在野の修行者であったミトラヨーギンとの立場の違いによるのかもしれない。

NPY や VA がチベットに伝わったかなりはやい段階で、おもにタントラの階梯にしたがってこれらの文献に説かれるマンダラの配列に変化が生じたことを、かつて別の機会で推測したことがあるが⁽²⁹⁾、そのひとつの例証として、AMM をあげることができるかもしれない。

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

『テプテルゴンボ』によれば、ミトラヨーギンは観音から「4つのタントラのすべてのアビシェーカを、ひとつのマンダラで1回で与えられた」という。このことは PRM においてもミトラヨーギン自身の言葉で示唆されていた。AMM で説明されたマンダラの現観は、このための観想法であった。はたしてその方法がいかなるものであったのか、さらにその実際の方法がチベットやネパールの仏教に受け入れられたかについては、稿を改めて考察したい。

[注]

- (1) 「現観」の語のこのような用例については谷口（1988：43）参照。後述のアバヤーカラグプタの『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī*にも、尊格の觀想に「現観」の文献を参照するようにという指示が見られる（森 1995：36）。また同じアバヤーカラグプタの『ニシュパンナヨーガーヴァリー』*Nispannayogāvalī*のチベット訳で、シャーキャシュリーバドラによる旧訳（TTP, No. 5023）では、タイトルが『吉祥文殊金剛などの次第の現観集成書ニシュパンナヨーガーヴァリー』*Śrīmañjuvajrādikramābhīsamayasamuccayaniśpannayogāvalī*となっている。シャーキャシュリーバドラは AMM の著者ミトラヨーギンとほぼ同時代の人物。
- (2) 密教関係のサンスクリット写本についてまとめた塚本他（1989）にも AMM やミトラヨーギンに関する情報は含まれていない。
- (3) 北京版ではサンスクリットのタイトルが *samatipatramale* (*samādhipatramalā?*) と記されているが、チベット訳の *mNgon par rtogs pa mu tig gyi phreng ba* にしがたい、「アビサマヤ・ムクター・マーラー」*Ahisamayamuktāmālā* を正しいタイトルと見る。これは北京版の勘同目録にも採用されているタイトルである（大谷大学 1983：1003）。
- (4) VA については桜井（1996）および拙著（森 1997, Mori 1997）参照。なお「アビシェーカ」の語は弟子の入門儀礼全体を指す場合にも、その一部のプロセスにも用いられる。本稿では前者を「アビシェーカ」、後者を「灌頂」と呼んで区別する。
- (5) Roerich (1976: 1030—1043)。チベット語テキストは敦他（1985）を用いた。
- (6) トプ翻訳官の年代は立川（1987：108）による。羽田野（1957：621）は生年を西暦1172年としている。田中・吉崎（1998：29—30）はトプ翻訳官がカトマンドゥにやってきたのを1195年とし、ミトラヨーギンと会った年を1198年としている。ただしその典拠は示されていない。
- (7) 立川（1987：68）
- (8) 後世のチベット仏教では「ミトラヨーギン流の観音の成就法」が伝えられたらし。たとえば『パンченラマの成就法集』第25番や53番 (Lokesh Chandra 1974) や、後述の『タントラ部集成』の第90番 (bSod nams rGya mtsho 1983) に

流派名として彼の名前があげられている。

- (9) このほか、作者名は示されていないが、次の二点もミトラヨーギンの著作である可能性がある。

Śribhagavadekajaṭāstotra, dPal bcom ldan 'das ral pa gcig pa la bstod pa, TTP, No. 2979, Vol. 68, 13. 3. 6-14. 3. 1. (Tr. Buddhaśribhadra, Byams pa'i dpal).

Svacittavisrāmopadeśapañcavimśatikāgāthā, Rang gi sems ngal gso ba'i man ngag tshigs su bcas pa nyi shu rtsa Inga pa, TTP, No. 2980, Vol. 68, 14. 3. 1-14. 5. 6. (Tr. Śri Jaganmitrānanda, Byams pa'i dpal).

ひとつめはエーカジャターに対するストートラで、ふたつめは観音の成就法についての25偈からなるウパデーシャである。「ミトラの120法」の第3の部分に符合している。またいずれの訳者の中にも、ミトラヨーギンをチベットに紹聘したトプ翻訳官が含まれる。

- (10) TTP, Vol. 87, 23. 3. 2-6 ; 29. 1. 5-8.

- (11) TTP, Vol. 87, 47. 5. 3-6.

- (12) これらの例はシャーキャシュリーバドラによる『ニシュパンナヨガーヴァリ一』の旧訳においても認められる訳文の特徴である。この時代の翻訳に固有のものであるのかもしれない。

- (13) このようにAMMの108種のマンダラの配列を何かひとつの原理で説明することは困難であるが、9種ずつ12のグループに分割すると、かなりのグループが互いに密接な関係にあるマンダラで構成される。たとえば第19～27の父タントラのマンダラ、第28～36のヘーヴアジュラ関係のマンダラ、第37～45のサンヴァラ関係のマンダラなどである。しかし、12のグループのすべてにわたってこのような明確な意図を見いだせるわけではなく、あくまでも推測の域を出ない。また、かりにミトラヨーギンが9種ずつ12のグループで全体を構成していたとしても、そうする必然性は読みとれず、単に記憶しやすいように配列しただけであったかもしれない。

- (14) 森(1996) 参照。

- (15) AMMでは第1重に色金剛女 Rūpayajrī 以下の四金剛女が含まれるが、これらはNPYでは第3重に属する。逆にNPYでは第2重に置かれる内の四供養菩薩が、AMMでは第3重に位置する。

- (16) NPYのパンチャラクシャー・マンダラはパンチャラクシャー（五守護）と四攝菩薩（女性形）の九尊と、カーリー Kāli, カーララートリ Kālarātri, カーラカルニ Kālakarṇī, マハーヤシャー Mahāyaśā (VAではシュヴェーター Śvetā) の合計13尊で構成されている。これに対し、AMMではカーリー以下の4女尊に代わって、四天王と外の四供養菩薩の8尊が加わる。

- (17) 最初のマンダラからはダーキニー Dākinī, ラーマー Lāmā, カンダローハー Khaṇḍarohā, ルーピニー Rūpinī を除き、さらに6種のマンダラすべてにカーカースヤー以下の獣頭の4女尊と、ヤマダーディー以下のヤマの眷族の4女尊を加える。

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

- (18) 第10番の金剛界大マンダラ、第13番の九仏頂マンダラ、第75番の法界語自在マンダラなど。
- (19) プトンの「聴聞録」(Lokesh Chandra 1971: ff. 82. 4-83. 1), ツォンカパ「聴聞録」(TTP, No. 6138, Vol. 152, 151. 5. 6-152. 1. 1), 『テプテルゴンボ』(Roerich 1976: 801) 参照。
- (20) 'Jam dbyang blo gter dbang po (1971)
- (21) bSod nams rGya mtsho (1983)
- (22) Tsewang Taru (1985)。同書については1986年に高田順仁氏により御教示いただいた。また周他編(1995)の第5巻にも収録されている。
- (23) ドルテンの部分に関しては、無上ヨーガの下位分類として「父タントラ」(*rnal 'byor bla med pha rgyud*)「母タントラ」(*rnal 'byor bla med ma rgyud*)の別が、MDH自身によってもそれぞれ記されている。
- (24) 現存するタンカを表4のローマ数字で示すと I, II, VII, VIII, IX, XIII, XIV の7点である。また同じ内容を持った別のヴァージョンとして XI, XII の2点がある。
- (25) Ngag dbang Blo bzang chos ldan dpal bzang po (Kon ting phu'u shan bkrang tshi tā kan śrī, lCang skyā hu thog thu), *rDzogs 'phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rim pa lag tu blangs bde bar dgod pa*, TTP, No. 6236, Vols. 162-3, 181. 1. 1-22. 4. 3. なお、この段落の内容については拙稿(1998b)でくわしく論じたので参考されたい。また、14点のマンダラ集のうち第14番の作品の概要については拙稿(1998a)で示した。
- (26) 典拠になった文献については、たとえば前掲のチャンキャ1世による儀軌(TTP, No. 6236)などがあげられるであろう。なおMDHには直接の典拠になった文献として、ミトラの部分には mDon rtogs mu tig phreng ba'i gsal byed blo gsal mgul rgyan が、ドルテンの部分には sGrub thabs mthong ba don grub の2文献があげられている(Tsewang Taru 1985: 247-248)。このうち前者は 'On rGyal sras sphrul sku bsKal bzang thub bstan 'jigs med bstan pa'i rgyal mtshan (1985)として刊行されている。同書については国立民族学博物館教授立川武蔵先生より閲覧の機会をいただいた。記して謝意を表します。
- (27) 田中・吉崎(1998: 160-162)参照。
- (28) 羽田野(1957: 13)
- (29) 森(1998b)参照。

略号

AMM: *Abhisamayamuktāmālā*.

MDH: *Mitra dang rdor phreng gi lha tshogs kyi gtso bo'i sku brnyan mthong ba don ldan bzhugs so.*

NPY : *Niṣpannayogāvalī*.

PRM : *Padaratnamālā*.

TTP : Tibetan Tripitaka, the Peking edition. 『影印北京版西藏大藏經』鈴木學術財團。

VA : *Vajrāvalī-nāma-mandalopāyikā*.

文献

大谷大学 1983 『大谷大学図書館蔵西藏大藏經丹殊爾勘同目録』(I, 6) 大谷大学図書館。

敦・循努白 1985 『青史』四川民族出版社出版。

桜井宗信 1996 『インド密教儀礼研究——後期インド密教の灌頂次第』法藏館。

周紹良他編 1995 『藏密修法秘典(全5冊)』華夏出版社。

立川武藏 1987 『西藏佛教宗義研究 第五卷 トウカン『一切宗義』カギュ派の章』東洋文庫。

田中公明・吉崎一美 1998 『ネパール仏教』春秋社。

谷口富士夫 1988 「現観の智恵と対象——『現観莊嚴論』における一刹那の覚知」『宗教研究』62(3): 41-59。

塙本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文 1989 『梵語仏典の研究IV 密教經典篇』平楽寺書店。

羽田野伯猷 1957 「Kāśmira-mahāpandita Śākyasrībhadra ——チベット近世仏教史・序説」『密教文化』21(5): 1-21。

森 雅秀 1995 「インド密教におけるプラティシュター」『高野山大学密教文化研究所紀要』9: 27-65 (横組)。

森 雅秀 1996 「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』15: 28-42。

森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。

森 雅秀 1998a 「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」第14番の概要」『高野山大学論叢』33: 55-72。

森 雅秀 1998b 「ツインマーマン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」——チベットにおけるマンダラ伝承の一事例」『美術史』145: 64-81。

森 雅秀 1999 「『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説の108マンダラ」『高野山大学密教文化研究所紀要』12: 1-116。

Bhattacharyya, B 1972 (1949) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpandita Abhayākaragupta*. G.O.S. No. 109. Baroda : Oriental Institute.

bSod nams rGya mtsho 1983 *The Tibetan Manḍalas, the Ngor Collection*. Tokyo : Kodansha.

'Jam dbyang blo gter dbang po 1971 *rGyud sde kun btus. Texts Explaining the Significance, Techniques and Initiations of a Collection of One hundred and*

ミトラヨーギン著『アビサマヤ・ムクター・マーラー』所説のマンダラ

Thirty two Mandalas of the Sa-sky-a-pa Tradition. Delhi : N. Lungton & N. Gyaltsan.

Lokesh Chandra (reproduced) 1971 *The Collected Works of Bu-ston. Part 26.* New Delhi : International Academy of Indian Culture.

Lokesh Chandra (reproduced) 1974 *Sadhana-mala of the Panchen Lama bsTan pa'i ni ma phyogs las rnam rgyal entitled Yi dam rgya mtho'i sgrub thabs rin chen 'byun gnas kyi than thabs rin 'byun don gsal*, 2 parts. New Delhi : International Academy of Indian Culture.

Mori, M. 1997 *The Vajravāli of Abhayākarakṛṣṇa*. (PhD Dissertation submitted to the University of London).

'On rGyal sras sphrul sku bsKal bzang thub bstan 'jigs med bstan pa'i rgyal mtshan 1985 *Mi tra brgya rtsa'i dkyil 'khor gyi lha tshogs rnams kyi mngon par rtogs pa mu tig phreng ba'i gsal byed blo gsal mgul rgyan : Detailed visualizations for the deities of the Mi tra brgya rtsa mandala*. Delhi : Danjeev Press.

Roerich 1976 (1949) *The Blue Annals*. Delhi : Motilal Banarsi Dass.

Tsewang Taru (published) 1985 *Mitra dang rdor phreng gi lha tshogs kyi gtso bo'i sku brnyan mthong ba don ldan bzhugs so* (*Illustrations with visualization instructions and seeds mantras of the various vajrayāna Buddhist deities whose initiations are transmitted in the Vajravāli (sic) of Abhayākarakṛṣṇa and the Mitra brgya tsa collection*). Delhi : Ladakh Buddha Vihara (reproduced from the 1938 Beijing lithograph edition).

付記

本稿脱稿後、田中公明氏（東方研究会）より、韓国のハン=ビッツ・コレクションの中にAMMのマンダラを描いた作品があるという御教示があり、さらにその後、この作品を収録するハングル版の図録（K. Tanaka ed., *Art of Thangka : From Hahn Kwan-ho Collection*, Seoul, Hahn Foundation for Museum, 1999）もお送りいただいた。作品はミトラとドルテンのふたつの部分からなり、いずれも横長の巻物状の紙に原則として上下二段にマンダラが淡彩で描かれている。各マンダラには尊格は描かれないが、一部のマンダラでは主尊のみ三昧耶形で表されている。田中氏が同書の中で示したマンダラのリストを見ると、ミトラの部分はMDHと同じ配列をとるようであるが、ドルテンの部分は興味深いことに、ゴル寺のタンカ集と同じ順序で並べられている。AMMのマンダラのチベットでの実例として注目すべき作品であろう。田中氏の御教示に感謝したい。

なお拙稿（1999）はAMMの108種のマンダラの名称と、各マンダラの全尊格名、および尊名索引からなる。本稿の資料篇としてあわせて参照していただければ幸いである。

表1 『アビサマヤ・ムクター・マーラー』の108種のマンダラ

108のマンダラの通し番号(太字), マンダラの名称, 尊数(カッコ内の数字), チベット訳テキストの該当箇所(北京版の頁, 葉, 行)の順に記載。

1 (名称なし)(17)	29.2.2-30.2.1
2 9尊マンダラの現観(9)	30.2.1-3.6
3 世尊金剛手13尊鉄筒(lcags sbugs ma)のマンダラの生起[次第](13)	30.3.6-4.3
4 聖文殊具秘密の現観(53)	30.4.3-5.4
5 チャンドラゴーミン流の現観(17)	30.5.4-31.3.8
6 怒怒王馬頭の現観(17)	31.3.8-4.5
7 聖大慈者の13尊(13)	31.4.5-5.2
8 金剛手の心マンダラの現観(13)	31.5.2-4
9 火炎日輪尊の業マンダラの現観(17)	31.5.4-8
10 金剛界大マンダラの生起[次第](53)	31.5.8-32.4.1
11 吉祥最勝マンダラの現観(61)	32.4.1-5.7
12 普明根本マンダラの觀想の現観(97)	32.5.7-33.1.8
13 九仏頂マンダラの現観(37)	33.1.8-2.5
14 一切義成就マンダラの現観(53)	33.2.5-3.1
15 遍調伏マンダラの現観(53)	33.3.1-4
16 降三世マンダラの現観(53)	33.3.4-4.2
17 無量寿の語マンダラの現観(13)	33.4.2-5
18 大楽功德のマンダラの現観(138)	33.4.5-5.2
19 吉祥秘密集会32尊の聖父子の流儀の現観(32)	33.5.2-34.3.7
20 ジュニヤーナバーダの19尊の現観(19)	34.3.7-5.6
21 秘密集会の十忿怒尊に囲まれた金剛フーソンカラのマンダラ(11)	34.5.6-35.1.4
22 文殊ヤマーリ13尊の現観(13)	35.1.4-3.3
23 六面文殊の現観(21)	35.3.4-4.4
24 文殊赤ヤマーリの現観(14)	35.4.4-5.5
25 ヴァジュラヴァイラヴァの現観(9)	35.5.6-36.2.1
26 ヴァイローチャナラクシタ[流]のバイラヴァ父母19尊の現観(18)	36.2.2-4.4
27 一面二臂のバイラヴァの現観(9)	36.4.4-5.2
28 世尊八面十六臂ヘーヴァジュラの現観(9)	36.5.2-37.1.4
29 六臂[ヘーヴァジュラ]の現観(9)	37.1.4-8
30 四臂[ヘーヴァジュラ]の現観(9)	37.1.8-2.1
31 二臂[ヘーヴァジュラ]の現観(9)	37.2.1-3
32 ナイラートミヤー15尊の現観(15)	37.2.3-6
33 『サンプタ[タントラ]』所説ヘーヴァジュラ18尊の現観(18)	37.2.6-4.4
34 六臂[ヘーヴァジュラ]の現観(18)	37.4.4-7
35 四臂[ヘーヴァジュラ]の現観(18)	37.4.7-8
36 二臂[ヘーヴァジュラ]の現観(18)	37.4.8-5.2
37 世尊チャクラサンヴァラ62尊の現観(62)	37.5.2-38.2.2
38 黄色[チャクラサンヴァラ]62尊の現観(62)	38.2.2-5
39 青色[チャクラサンヴァラ]62尊の現観(62)	38.2.5-6
40 白色サンヴァラ62尊の現観(62)	38.2.6-8
41 サンヴァラ明妃37尊の生起[次第](37)	38.2.8-3.2
42 サンヴァラ13尊の現観(13)	38.3.2-4.2
43 サハジャ[ヘルカ]5尊のマンダラ(5)	38.4.2-6
44 ティローバのサンヴァラ9尊の現観(9)	38.4.6-5.3
45 アドヴァヤヴァジュラ作サンヴァラ8尊の現観(8)	38.5.3-39.1.2
46 1.『ヴァジュラパンジャラ[タントラ]』の5部の5マンダラの現観(9)	39.1.2-4
47 2.(9)	39.1.4-8
48 3.(9)	39.1.8-2.4
49 4.(9)	39.2.4-8

50 5.(9)	39.2.8-3.4
51 1. シャットチャクラヴァルティンの6種の現観(16)	39.3.4-3.8
52 2. 大日の現観(16)	39.3.8-4.3
53 3. ラトナダーカの現観(16)	39.4.3-4.5
54 4. パドマダーカの現観(16)	39.4.5-8
55 5. 阿閦ヴァジュラダーカの現観(16)	39.4.8-5.3
56 6. 不空成就ヴィシュヴァダーカの現観(16)	39.5.3-5.7
57 『サンブタ[タントラ]』の23尊の現観(23)	39.5.7-40.1.4
58 マハーマーヤーの6尊の現観(6)	40.1.4-2.4
59 マハーマーヤーの現観(5)	40.2.4-7
60 勇者マハーマーヤーの独尊の念誦(1)	40.2.7-8
61 八聖仙の現観(45)	40.2.8-4.2
62 十護方神と四天王の現観(23)	40.4.2-6
63 八大魔王マングラの現観(13)	40.4.6-8
64 『チャトゥフピータ[タントラ]』のヨーガーンバラの現観(57)	40.4.8-41.1.8
65 『チャトゥフピータ[タントラ]』のジュニャーナダーキニーの現観(13)	41.1.8-2.7
66 ブッダカバーラの現観(25)	41.2.8-3.7
67 ブッダカバーラ9尊の現観(9)	41.3.7-4.3
68 金剛ターラー11尊の現観(11)	41.4.3-5.2
69 クルクッラー女尊13尊の現観(13)	41.5.2-4
70 マーリーチー女尊の現観(25)	41.5.4-42.1.5
71 白弁財天女尊の現観(13)	42.1.5-8
72 大母神般若波羅蜜の現観(59)	42.1.8-4.1
73 吉祥カラチャクラの現観(487)	42.4.2-43.4.7
74 文殊金剛42尊の現観(43)	43.4.7-5.8
75 阿闍梨マンジュシュリーキールティがお説きになった法界語自在の現観(119)	43.5.8-44.3.2
76 『ナーマサンギーティー』の深遠な教えの現観(21)	44.3.2-4
77 蓮華舞自在の現観(18)	44.3.4-4.3
78 百字[真言]の尊金剛薩埵の現観(17)	44.4.3-5
79 智輪アラパチャナの現観(5)	44.4.5-8
80 バンチャラクシャーの現観(17)	44.4.8-5.7
81 忽怒王不動の現観(11)	44.5.7-45.1.2
82 ジャーリバ[流]の大輪金剛手の現観(14)	45.1.2-2.3
83 甘露滴の現観(1)	45.2.3-7
84 略集の現観(1)	45.2.7-3.1
85 青仏塔の現観(7)	45.3.1-6
86 ガルダの裙をつけたヴァジュラチャンダの現観(5)	45.3.6-4.2
87 金剛ガルダの現観(9)	45.4.2-5
88 聖觀音父母尊の現観(9)	45.4.5-5.3
89 聖獅子吼[觀音]の現観(5)	45.5.3-7
90 不空羈索[觀音]の現観(5)	45.5.7-46.1.3
91 ティローパ流の三面六臂ヴァジュラヴァーラーヒーの現観(13)	46.1.3-8
92 ナーローパ流のヴァジュラヴァーラーヒーの現観(13)	46.1.8-2.2
93 (名称なし)(13)	46.2.2-3
94 一切義成就[ヴァジュラヴァーラーヒー]の現観(13)	46.2.3-4
95 断頭[ヴァジュラヴァーラーヒー]の現観(13)	46.2.5-7
96 黒ヴァジュラヴァーラーヒーの現観(5)	45.2.7-3.2
97 マイトリーパ流のダーキニーの現観(9)	46.3.2-5
98 四面ヴァジュラヴァーラーヒーの現観(37)	46.3.5-8
99 ターラー21尊の現観(21)	46.3.8-5.6
100 百部の現観(100)	46.5.6-47.1.2
101 世尊阿閦の現観(13)	47.1.2-4
102 大女尊の陀羅尼經典にもとづいた現観(35)	47.1.4-6
103 ヴァジュラヴィダーラナの現観(23)	47.1.6-2.2
104 仏頂尊勝の現観(9)	47.2.2-7
105 白傘蓋(29)	47.2.7-3.6
106 黄色葉衣の現観(5)	47.3.7-4.3
107 夜叉黄色ジャンバラ父母尊の現観(18)	47.4.3-7
108 吉祥マハーカーラの現観(9)	47.4.7-2.3

表2 『アビサマヤ・ムクター・マーラー』に含まれる『ニシュパンナヨーガーヴァリー』のマンダラ

マンダラの名称	AMM	NPY	MDH
Chap. 19. Vajradhātumandala(53)	10	35	37
Chap. 22. Durgatipariśodhanamandala(37)	13	38	38
Chap. 2. Piṇḍikramoktākṣobhyamandala(32)	19	2	2
Chap. 1. Mañjuvajramandala(19)	20	1	1
Chap. 11. Vajrahūṇakāramandala(11)	21	22	12
Chap. 15. Yamārimandala(13)	22	31	4
Chap. 8. Navātmakahevajracatuṣṭayamandala(9)	28-31	16-19	23-26
Chap. 5. Saptadaśātmakahevajramandala(17)	33-36	5-8	27-30
Chap. 12. Samvaramandala(62) <i>four faces, 12 arms</i>	37	23	6
Chap. 12. Cakrasaṃvaraṇamandala(62) <i>one face, two arms</i>	38	25	8
Chap. 12. Cakrasaṃvaraṇamandala(62) <i>one face, two arms</i>	39	24	7
Chap. 12. Vajravārāhiṇimandala(37)	41	26-28	9-11
Chap. 24. Pañcadākamandala(53)	46	40	31
Chap. 25. Saṭcakravartimandala(42)	51	41	13
Chap. 6. Nairātmyāmandala(23)	57	9	32
Chap. 9. Mahāmāyāmandala(5)	58	20	20
Chap. 14. Yogāmbaramandala(58)	64	30	21
Chap. 4. Jñānaḍākinimandala(13)	65	4	22
Chap. 13. Buddhapālāmandala(25)	66	29	18
Chap. 10. Buddhakapālāmandala(9)	67	21	19
Chap. 16. Vajratārāmandala(11)	68	32	35
Chap. 6. Kulukullāmandala(15)	69	11	34
Chap. 17. Māricīmandala(25)	70	33	41
Chap. 26. Kālacakramandala(634)	72	42	36
Chap. 20. Tricatvāriṇśadātmakamañjuvajramandala(43)	75	36	3
Chap. 21. Dharmadhātuvāgīśvaraṇamandala(221)	76	37	39
Chap. 18. Pañcaraksāmandala(53)	81	34	42

AMM : Abhisamayamuktāmälā ; NPY : Niṣpannayogāvalī ; MDH : Mi tra dang r dor phreng gi lha tshogs kyi gtso bo'i sku brnyan mthong ba don ldan bzhugs so

マンダラの名称と章番号(Chap. 19 etc.)は B. Bhattacharyya *Niṣpannayogāvalī of Mahāpanḍita Abhayākaragupta*. G.O.S. No. 109. Baroda : Oriental Institute (1972)にしたがう。マンダラ名の後の()内の数字は尊数を示す。AMM の項の番号は 108 種のマンダラの通し番号に、NPY の番号は同書のマンダラを 42 種に数えた場合の番号、MDH は表 3 の白描集のリストにそれぞれ対応する。

表3 『ミトラ白描集』尊名リスト

No.	尊名	AMM		
	Mitra			
0.	Grub chen Mi tra dzo ki		32. Don yod grub pa	14
			33. 'Gro ba 'dul ba	15
			34. dPal mchog dang po'i rdo rje sems dpa'	11
	<i>Bya rgyud (Kriyā-tantra)</i>		35. 'Jam dpal gsang ldan	4
1.	dByangs can ma	71	36. 'Jam dpal ye shes sems dpa'	5
2.	Ri khrod lo ma can	106	37. 'Jam dpal mtshan brjod	76
3.	'Phags ma gdugs dkar mo can	105	38. Yum chen mo sher phyin ma	72
4.	gTsug tor rnam rgyal mo	104	39. rNam snang	12
5.	Dzambha la	107	40. rDo rje sems dpa'	78
6.	rGyal ba shākya thub pa	102		
7.	'Jam dpal dbyang a ra pa tsa na	79	<i>rNal 'byor bla med rgyud (Anuttarayoga-tantra)</i>	
8.	sPyan ras gzigs	7	41. gShin rje gshed gdong drug	23
9.	sPyan ras gzigs kha sa rpā ḥi	90	42. gShin rje gshed	24
10.	'Jig rten dbang phyug seng ge'i sgra	89	43. rDo rje 'jigs byed	25
			44. rDo rje 'jigs byed	26
11.	rTa mgrin	6	45. rDo rje 'jigs byed zhal gcig phyag gnyis pa	27
12.	Mi g'yo ba	81	46. Phyag rdor 'khor lo chen po	82
13.	rDo rje rnam 'joms	103	47. bDe mchog	40
14.	Phyag rdor mdo lugs	2	48. 'Khor lo sdom pa	42
15.	Phyag rdor bdud rtsi thig pa	83	49. 'Khor lo sdom pa lhan skyes	43
16.	Phyag rdor gos sngon can	84	50. 'Chi ba skyob bde mchog	44
17.	Phyag rdor mchöd rten sngon po can	85	51. gNyis med rdo rje'i bde mchog	45
18.	Phyag rdor lcags sbugs ma	3	52. rDo rje phag mo zhal gsum phyag drug	91
19.	Phyag rdor gtum po khyung sham can	86	53. rDo rje phag mo zhal gnyis ma	93
20.	Khyung nag 'bar ba	87	54. rDo rje phag mo don grub ma	94
21.	Mi 'khrugs pa	101	55. rDo rje phag mo dbu bcad ma	95
	<i>sPyod rgyud (Caryā-tantra)</i>		56. Nā ro ta pa lugs kyi rdo rje phag mo	
22.	Phyag rdor 'gro bzang	1	57. Mai tri mkha' spyod ma	92
	<i>rNal 'byor rgyud (Yoga-tantra)</i>		58. rDo rje phag mo zhal bzhi ma	97
23.	rNam par snang mdzad	100	59. rDo rje phag mo	98
24.	Tshe dpag med	17	60. sGyu ma chen mo he ru ka	96
25.	Phyag na rdo rje	8	61. He ru ka rdo rje sems dpa'	59
26.	Phyag na rdo rje	18	62. Thugs rje chen po rgyal ba rgya mtsho	60
27.	Khro bo me ltar 'bar ba	9	63. rTa mgrin padma gar gyi dbang phyug	88
28.	Phyag na rdo rje	62	64. rJe btsun sgrol ma	77
29.	Phyag na rdo rje	61		
30.	Phyag na rdo rje	63		
31.	Khro bo khams gsum rnam rgyal	16		

65. dPal rje nag po chen po phyag bzhi pa	22. Ye shes mkha' 'gro ma	65
108	23. sNying po khai rdor thod pa can	28
rDor phreng	24. sKu kyai rdor	31
0. Abhayākaragupta	25. gSung kyai rdor	30
<i>rNal 'byor bla med pha rgyud</i> (<i>Anuttarayoga-tantra</i> , <i>Father class</i>)	26. Thugs kyai rdor	29
1. gSang 'dus 'jam rdor	27. sKu kyair rdor	36
2. gSang 'dus mi bskyod pa	28. gSung kyai rdor	35
3. rNam snang 'jam rdor	29. Thugs kyai rdor	34
4. dGra nag gshin rje gshed	30. sNying po kyai rdor mtshon cha can	
5. bDe mchog rdo rje sems dpa'	31. 1. rDo rje mkha' 'gro	46
<i>rNal 'byor bla med ma rgyud</i> (<i>Anuttarayoga-tantra</i> , <i>Mother class</i>)	2. Sangs rgyas mkha' 'gro	47
6. bDe mchog	3. Rin chen mkha' 'gro	48
7. bDe mchog zhal gcig phyag gnyis pa	4. Padma mkha' 'gro	49
38	5. sNa tshogs mkha' 'gro	50
8. bDe mchog zhal gcig phyag gnyis pa	32. rDo rje bdag med ma	57
37	33. rDo rje bdag med ma	32
9. rDo rje phag mo	34. Ku ru ku le	69
10. rDo rje phag mo	35. rDo rje sgrol ma	68
11. rDo rje phag mo	<i>rNal 'byor rgyud (Yoga-tantra)</i>	
12. rDo rje hūm mdzad	36. Íus 'khor	73
13. 1. 'Khor bsgyur ye shes mkha' 'gro	37. sNang mdzad rdor dbying	10
rdor sems	38. Shākyā seng ge	13
51	39. Chos dbying gsung dbang	75
2. 'Khor bsgyur rtag pa sangs rgyas	<i>sPyod rgyud (Caryā-tantra)</i>	
mkha' 'gro	40. Phyag rdor 'byung po 'dul byed	欠
52	<i>Bya rgyud (Kriyā tantra)</i>	
3. 'Khor bsgyur rdo rje nyi ma rin	41. 'Od zer can ma	70
chen mkha' 'gro	42. So sor 'brang ma	80
53	43. Nor rgyun ma	欠
4. 'Khor bsgyur padma gar dbang	44. gZa' yum rig pa chen mo	欠
padma mkha' 'gro	45. rNam rgyal ma	欠
54		
5. 'Khor bsgyur he ru ka rdo rje		
mkha' 'gro		
55		
6. 'Khor bsgyur rta mchog sna tshogs		
mkha' 'gro		
56		
14. rDo rje bdud rtsi		
欠		
15. rDo rje hūm mdzad		
欠		
16. bDud rtsi khrag 'thung		
欠		
17. bDud rtsi 'khyil ba		
欠		
18. Sangs rgyas thod pa		
66		
19. Sangs rgyas thod pa		
67		
20. Mahā ma' ya		
58		
21. rNal 'byor nam mkha'		
64		

表4 「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」全14点の内容

I	1. 秘密集会文殊金剛 19 尊成就法 2. 秘密集会阿閦金剛 32 尊成就法 3. 『幻化網タントラ』所説の大日文殊 43 尊金剛尊成就法 4. 黒ヤマーリ 13 尊成就法	186.3.8 192.2.4 193.5.4 196.3.8
II	5. 『ヘーヴァジュラタントラ所説』の4種のヘーヴァジュラ 9 尊成就法, 第1 6. 同, 意ヘーヴァジュラ 9 尊成就法 7. 同, 口ヘーヴァジュラ 9 尊成就法 8. 同, 身ヘーヴァジュラ 9 尊成就法	197.4.7 198.5.6 199.1.5 199.1.7
III	9. 『ヴァジュラパンジャラ・タントラ』所説のパンチャダーカ 53 尊成就法	199.2.4
IV	10. 『サンブタ・タントラ』所説のナイラートミヤー 23 尊成就法 11. 『ヘーヴァジュラ・タントラ』所説のナイラートミヤー 15 尊成就法 12. 『ヘーヴァジュラ・タントラ』所説の世尊クルクッラー 15 尊成就法 13. 『ヴァジュラパンジャラ・タントラ』所説の金剛ターラー 11 尊成就法	201.2.1 202.1.1 202.2.5 202.4.2
V	14. 『サンブタ・タントラ』所説のヘーヴァジュラ 17 尊の4種のマンダラ, ガルバ・ヘーヴァジュラの成就法 15. 同, 意ヘーヴァジュラ 17 尊成就法 16. 同, 口ヘーヴァジュラ 17 尊成就法 17. 同, 身ヘーヴァジュラ 17 尊成就法	203.1.6 203.5.7 204.4.1 204.4.5
VI	18. 『サンブタ・タントラ』所説のサンヴァラ寂靜金剛薩埵 37 尊成就法 19. 『サンヴァラ根本タントラ』所説の四面十二臂チャクラサンヴァラ 62 尊成就法 20. 吉祥青色一面二臂チャクラサンヴァラ 62 尊成就法 21. 黄色一面二臂チャクラサンヴァラ 62 尊成就法	204.4.5 207.1.8 208.4.5 209.1.2
VII	22. 赤色ヴァジュラヴァーラー 37 尊成就法 23. 青色ヴァジュラヴァーラー 37 尊成就法 24. 黄色ヴァジュラヴァーラー 37 尊成就法 25. 『アビダーナ・タントラ』所説の忿怒ヴァジュラフーンカーラ 11 尊成就法	209.2.8 209.5.1 209.5.7 210.2.2
VIII	26. 『アビダーナ・タントラ』所説のサンヴァラ六転輪王成就法	210.5.7
IX	27. 『金剛甘露タントラ』所説の4種のマンダラ, 金剛甘露 21 尊成就法 28. 同, 金剛フーンカーラ 29 尊成就法 29. 同, ヴァジュラヘルカ 21 尊成就法 30. 同, 甘露軍荼梨 13 尊成就法	212.5.7 213.5.7 214.4.7 215.2.7

X	31. 『ブッダカパーラ・タントラ』所説のブッダカパーラ 25 尊成就法 32. 吉祥ブッダカパーラ 9 尊成就法 33. 『マハーマーヤー・タントラ』所説のマハーマーヤー 5 尊成就法 34. 『チャトゥフピータ・タントラ』所説のヨーガーンバラ 58 尊成就法 35. 『チャトゥフピータ・タントラ』所説のジュナーナダーキニー 13 尊成就法	216.1.2 216.4.4 1.1.1 1.3.1 2.4.2
XI	36. 『吉祥カラチャクラ・タントラ』所説のカラチャクラ 634 尊成就法	3.2.2
XII	37. ヨーガ・タントラである『真実撰經』所説の金剛界 53 尊成就法 38. 『悪趣清淨タントラ』所説の九仏頂 37 尊成就法	10.1.5 11.4.5
XIII	39. 『幻化網タントラ』および師マンジュシュリーキールティがヨーガ・タントラに説明を加えた注釈書所説の法界語自在 221 尊成就法 40. 所作タントラ『ブータダーマラ・タントラ』所説ブータダーマラの 33 尊成就法 41. 『マーリーチー・タントラ』所説の世尊マーリーチー女尊 25 尊成就法	12.4.6 17.4.6 18.5.1
XIV	42. 『五守護』所説の大隨求明妃を中尊とする五守護 13 尊成就法 43. ヴァスダーラーの小品によるヴァスダーラー女尊 19 尊成就法 44. グラハマートリカの章により、北東に配したヴィドヤー女尊を中尊とする 46 尊あるいは 50 尊成就法 45. 尊勝の章による世尊仏頂尊勝 33 尊成就法	19.3.2 20.2.1 20.5.3 21.4.4

Ngag dbang Blo bzang chos ldan dpal bzang po (Kon ting phu'u shan bkrang tshi tā kan śrī, iCang skyā hu thog thu), rDzogs 'phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rim pa lag tu blangs bde bar dgod pa, TTP, No. 6236, Vols. 162-3, 181. 1.1-22. 4.3 による。行末の数字は各マンダラの記述の開始箇所を示す。